連載

世直し共闘

（最終回）

酒井雅親

21 墓穴

K校長が阪本小学校に着任してから組織した教員の親衛隊には、ひとつの特徴点があった。それは、東京の教員の世界に今なおくすぶり続けている〝学閥〟――東京学芸大学とその前身の豊島師範と青山師範――から外れたコースを歩んで来た者を選んでいることであった。

親衛隊の一人であるHは民間歴があり、私と同じ年ではあったが給料は私より低かった。寝返ったBも同様で、民間に勤めていた頃に苦学して教員免許状を取った努力家であった。おそらくKは、彼等が「教員として出遅れた」と意識している部分に眼をつけ、自分に従いてくれば「出世」の道も開けるぞ、といったエサをちらつかせたに違いない。事実、前教務主任のCは、私の出すビラを鷲掴みにして校長宅に駆け込んだ〝功績〟を買われて教頭になれた、ともっぱらの評判であった。

現教務主任のAの場合は、出遅れたわけではないが、教員では稀な「高卒」というハンディを背負っていた。彼自身、のちに「教員としての学歴のなさが私の人生を狂わせた」と述べている。

「世直し共闘」のビラを区内に撒いたその夕方、私はAの自宅の門を叩いた。Aには私の気持ちを分かってもらいたい、という思いがあった。彼の家は津田沼駅の近くにあり、私は帰宅途中、「酒井さん、ちょっと寄って

いかないか」という誘いに乗って上がり込み、彼の妻と、年老いてはいたが「お酒がおいしい」と言うその母親を混じえて、家族のようなつきあいを時々していたのである。駅前の屋台で一杯やることもあった。

この日はしかし、いつもと様子が違った。家族との接触をさせないように、私を奥の間に通したのである。そして、ビラを出すに至った私の説明をただ黙って聞いていた。彼は、何かを決意しているようであった。

翌日から、Aの態度がガラリと変わった。前夜、彼は腹を決めたのである。校長の下僕になりきろう、と。

Kにしてみれば、もってこいの鴨であった。「無能」なS教頭よりは余程使い途がある。校長は新手の指示を次々とAに発した。Aは忠実にそれを実行した。体操朝会に正装で出よという指示、酒井の言動を報告する義務、そして〝PTA委員引き降ろし作戦〟と、そのすべてを驚くまでの変身ぶりでやりきった。

Aは、憑かれたように走る自分の前途に、己れが背負った「ハンディ」を克服する一条の光を見出していたのであろうか。だが、その頑張りが実は、自ら墓穴を掘る結果になろうとは、彼も予想だにしなかったのである。

22 号泣

阪本小学校の六年生の約半分は、都内の私立中学を受験する。毎年、一月のその時期が近づくと、受験生が校長室前にずらりと並び、一人ずつ入って「面接」の模擬テストを受ける。「有名私立中入学」は〝名門校〟たる阪本小の親たちの夢でもある。

しかし、「有名私立中」に入れるのはごくわずかである。そこで校長は夏から秋にかけて「二流」「三流」の私立中を回り、できるだけ多くの児童を受け容れてもらえるよう〝お願い〟をして歩くことになっている。Aが六年生を担任していた一九八〇年の秋にも、校長は精力的に私立中を訪問していた。

ところが、一年後の八一年の暮れになって、その前年に、受験生の親たちから多額の現金が校長の手に渡った、

という噂が流れた。区教委が調査に乗り出した、との情報も入ってきた。校内で、再びヒソヒソ話が横行するようになった。Aはこの年、三年生の担任であったが、何食わぬ顔をしていたその裏で、実に大変な思いをしていたのである。しかし、私が真相らしき全貌を掴んだ時には、すでに事件にケリがついていた。

事の起こりは、前年のある六年父母からの区教委への〝垂れ込み〟にあったようである。金集めの音頭は父母側の校長親衛隊の首領格がとった。「あたしたちの子どものために駆けずり回って下さる校長先生に報いなくては…」という呼びかけに、誰も反対はできなかった。しかし、あのあくどい父母分裂策動への恨みを消し切れなかったある父母が訴えた、というわけである。

だが、区教委の動きを察知した校長の対応も素早かった。金はすべてAの手を通じて当時の父母に返還された。Kはこの時点で「あなたが始末をつけなさい」と、一切の責任をAに転嫁したのである。そして、ドジをふんだと見るAに対する校長の態度は日に日に冷たいものへと変わっていった。

阪本小学校は、八二年度から児童数の減少により学級数が落ち込んでいく。Aは、その〝過員解消〟の最初の生け贄とされた。まるでボロ切れを捨てるように、Kは「腹心」を追放したのである。

◇　◇

用務主事のMの命が危ない、と聞いた八三年の暮れ、私はAを見舞いに誘った。すでにMも区内の他校に、Aも千代田区に転出していたが、三人とも船橋市の住人なので、と声をかけたのである。「私も行こう」と、教頭のFが同行した。癌細胞がMの身体中に転移している、と聞いていた。

病院に到着した時には、Mが息を引き取った五分後であった。温もりの残るその身体に、Fが買ってきた浴衣を着せた。それを手伝いながら、Aは必死に何かを堪えているようであった。

病院からの帰りの路上で、突然Aが泣き出した。その声はだんだん大きくなり、人目を憚るほどであった。近

くの喫茶店に入って気を静めさせようとしたが、そこでもAは激しく泣き、「Mさんにすまない、みんなにすまない」と繰り返した。校長が現業に対する嫌がらせを行なっていた頃、彼はそれに直接加担したわけではない。それでもこのような詫びの言葉が口をついて出てきたのである。おそらく、Kの「腹心」として仕えた一連の行為に対する悔恨の情が一気に噴き出たのであろう。

Fと私は、なす術もなく、肩を震わせるAの姿に見入っていた。

23 新幹線

一九八二年の暮れに、全面改築中であった校長の自宅が完成した。そして、新年会を兼ねた、そのお披露目式の招待状が全教職員に配られた。非校長派は躊躇したが、「校長さんは還暦でもあるし、私の顔も立ててくれよ」という教頭の懇請に従ってほとんどが出席した。

女性校長で早めに辞めた妻の退職金と自分の退職金を注ぎ込む予定で建てたといわれるその家は、鉄筋コンクリートの三階建て。確かに〝豪邸〟と呼ぶにふさわしいものであった。一級建築士である娘婿の設計によるものだという。

「凄いなあ」と感嘆しながら見学していた私たちは、しかし、何か違う、という感じに捕らわれていた。三階にまで上ってみたが同じであった。窓という窓がすべて厚い一枚のガラス張りで密閉されており、引き違いの戸がないのである。「これは、新幹線だ」と思わず叫んだ私たちの声が耳に入ったのか、Kがやってきて「私は自然の風が入るのがいい、と言ったんだけど、娘婿は『暑けりゃ冷やせばいいし、寒けりゃ暖めればいい』と言ってねぇ…」と、こればかりはいかにも残念、といった風情であった。なるほど、全館冷暖房付きではある。しかし、このホテル並みの生暖かさの中で死ぬまで暮らすなんてできやしない、と私たちは呟いていた。

帰り道、私たちは「ふだん息が詰まるようなことをやってるから、ああいうことになる。退職金全部取られて

哀れな末路だ」と言って笑った。

24　花道

一九八三年一月十四日、阪本小の体育館は全国から集まった教師たちでいっぱいとなった。文部省小学校教育課程研究指定校（算数科）「問題解決能力を育てるための教材開発及び指導法の工夫」の発表会である。

評判は上々であった。明治図書から出した校長の顔写真入りの本も飛ぶように売れた。Kは終日笑みを絶やさなかった。この日ばかりは非校長派の面々も充実しているようであった。なんてったって自分たちの頑張りがこの成功をもたらしたのだ、という自負がそこにはあった。事実、研究発表の主要な部分はすべて彼等が担った。こうした努力に支えられて、Kは〝男の花道〟に立つことができたのであった。悪運の強い男だった。

この日私は、自分の係の任務を果たすと、急ぎ群馬へと駆けつけた。群学労誕生の日だったのである。

◇　　◇

「オーイ、出るぞぉ」との合図が主事室に伝えられた。「それ、おでましだ。爆竹でも鳴らすか」。もう、すっかり華やいでいた。玄関に全職員が整列する。その中を教頭に率いられたKがしずしずと進む。一人ひとりと握手を交わす。「ご苦労さまでした」「ありがとうございました」の声が次々にかけられる。「これが最後だ。派手にやろうぜ」と言っていた私の提案どおり、特に現業職員が大いにはしゃいでいた。

軍歌を唄いながら校長室前を掃いていてKに注意されたことのある用務主事のP子が最後に花束を渡し、玄関先まで出て、いつもの茶目っ気よろしく去って行くKに「さようならぁ、校長せんせ～い、お元気で～」と、いつまでも手を振った。そしてKの姿が見えなくなると振り返り、「きょうはやけに明るいね」と天井の電灯を指差した。みんながどっと笑った。

三月三一日、たくさんの人の心の中に忘れえぬ六年間の痕跡を残し、Kは去った。追い出そうとしてついに追

い出せなかった（採り手がなかった）私を残して――。

25 消えた上履き

新校長のJが着任した一九八三年度も、阪本小にとっては忙しい年となった。開校110周年を迎えたのである。

その式典が行なわれた十一月十二日の祝賀会での出来事。宴が進むにつれ、九卓あるテーブルの中でいつのまにか私のいるテーブルがメインになってしまった。現職員の中で私が一番の古手であることから、多くの旧職員が集まってきたのである。Kの前任であるLも、その前の校長も、歴代の教頭も寄ってきて、さながら旧管理職群の溜まり場となった。Jも敬意を表して仲間に入り、昔話に花が咲いた。

ふと気がつくと、Kがテーブルの周りをぐるぐる回っていた。話の仲間に入りたいのだが空席がない。だが、誰も席を譲ろうとしない。Kは空しく回っていた。

見ると、Kの相手になってくれるのは残された親衛隊のみであり、他は誰一人として近づこうとしないのであった。以後Kは、阪本小のいかなる行事にも顔を見せなくなった。

主（あるじ）を失った親衛隊は、翌年三月に二人が定年を待たず辞め、残りもその後の二年間ですべてが転出した。

◇　　◇

新校長のJは、従来阪本小にはなかった変な習わしを持ち込んだ。来賓用の下駄箱の最上段にKの名札を付け、そこにKが在職中に使っていた上履きを入れたのである。前校長がいつでも気軽に学校を訪問できるように、という配慮からだという。期間は退職後一年間。

ところが、半年ほど過ぎたある日、下駄箱の掃除をしていたPがKの上履きが無くなっていることに気づき、大騒ぎとなった。Jは青くなり、みんなが血眼になって捜したが、発見できなかった。

そのうちに私は、多くの疑惑の眼が私に向けられていることを知った。何度否定しても、それは消えなかった。今でも私は叫び続けている。俺は無実だ……！　（了）